

誰もが自分を表現できる 学校風土が生徒を伸ばす

宮城県 名取市立増田中学校

2011年の東日本大震災で生徒の多くが被災した名取市立増田中学校。

「生徒の意欲を引き出すには、学校が安心して自分を表現できる場所であればいけない」と佐藤俊隆校長は言う。教師はどのように生徒と向き合い、活躍の場を与えているのか。

私と生徒とのかかわり方

学校を生徒が自信を持って自分を表現できる場に

佐藤俊隆校長

「5つの場」を大切に 生徒の自己実現を支援する

生徒のやる気を引き出すための一番のポイントは、自己肯定感を高めることだと考えています。今の子どもは総じて自分に対する評価が低いようですが、私は子どもの能力が低いとは決して思いません。一人ひとりの生徒の持ち味を適切に評価し、その頑張りを教師

がきちんと認める。生徒自身が「自分の考えを表現していいんだ」「自分は出来る」と思えるような学校をつくるのが何よりも大切です。

どの生徒にも得意、不得意があります。授業で力を発揮できる生徒もいれば、部活動の中心選手として欠かせない存在だったり、行事の盛り上げ役として周囲から一目置かれる存在だったり、一人ひとりさまざまな個性を

School Data

◎ 1947（昭和22）年開校。「一人ひとりが光り輝く学校」を教育目標に掲げ、自分から考え、表現し、活動できる生徒の育成を目指す。部活動が盛んで、県中総体や東北大会に多数の部活動が出場している。



校長◎ 佐藤俊隆先生

生徒数◎ 533人 学級数◎ 17学級（うち特別支援学級2）

所在地◎ 〒981-1224 宮城県名取市増田字柳田 230

TEL◎ 022-384-2329

URL◎ <http://academic4.plala.or.jp/masu-jhs/>

公開研究会◎ 未定

持っています。生徒それぞれが自分の良さに自信を持ち、学校が安心して過ごせる居場所となるために、「授業」「学年・学級づくり」「生徒会活動」「学校行事」「部活動」の「5つの場」の大切さを、教職員全員で共通理解を図りながら、教育活動に取り組んでいます。

その活動を後押しするために、私が取り組んでいるのは学校便りの発行です。生徒の取り組みや活躍の様子を、時を置かずで紹介することによって、感動や感激を生徒や保護者と共有し、同じ方向を向いて次の一歩を踏み出したいと考えているからです。

本校のある名取市は、東日本大震災の被災

生徒の心に火をつける

地で、本校周辺にも500メートル手前まで津波が押し寄せ、3人の生徒が亡くなりました。被災して転入してきた生徒は29人、仮設住宅に住む生徒は約35人、今も約100人が支援を受けています。全校生徒は533人です。5人に1人はいまだに震災の影響を受けていることになります。

家庭では大変なことがたくさんあると思いますが、そうした状況でも生徒はけなげに頑張っています。2012年度に、本校の陸上部が初めて県の駅伝大会で男女共に入賞を果たすなど、生徒の努力がようやく報われつつあります。そうした頑張っている姿をいち早く学校便りで伝えることによって、少しでも生徒の励みになればよいと考えています。

英作文を生徒間で共有し 認め合う学級風土を醸成

生徒の居場所づくりは、教科指導でも出来ると思います。私は担任時代、担当の英語で、定期考査の2週間前に毎回自由英作文を宿題に出していました。生徒に提出させた英作文を、私が添削してから返却し、定期考査で同じ内容を書く問題を出すのです。テーマは、「生きているってどんなこと? 幸せってどんなこと?」など、生徒の生活や体験を基に書くものとしていました。

生徒が定期考査で書いた英作文は、1行であっても全員分をプリントにまとめ、試験後

に答案と一緒に配り、学年内で共有しました。生徒は友だちが何を書いているのか気になり、配られると英作文を必死になって読みます。

私は架空の人物の作り話や遠い世界の話をしたくありません。生徒のオリジナルなものを引き出して互いに共有しなければ、コミュニケーションの手段としての英語を学ぶ意味はないはず。どんなに英語が出来ない生徒でも、言いたいことや書きたいことはあります。書いたものを共有することによって、生徒に英語を読む必然性を与えると共に、「自分を表現していいんだ」という気持ちを育むことができると思っています。

校長となった今は、生徒と直接かかわる機会が多くなりました。ですから、出来るだけ機会を見つけて、生徒と接するようにしています。何より、生徒とかわかることが好きだからです。毎朝、学校近くの道路に立って交通安全指導を行い、生徒や保護者と一緒に花壇の整備や草むしりもします。部活動の大会前の激励会(壮行会)では、「花さか爺さん」を替え歌にした本校の応援歌を歌って生徒を励ましています。

週1回行う、不登校の生徒のための勉強会(水曜勉強会)も楽しみの1つです。水曜日の夜、不登校の生徒を学校に呼び、数学と英語の授業をします。生徒は学ぶ面白さを味わい、中には1カ月ほどで不登校から立ち直り、学校に来るようになった生徒もいます。



名取市立増田中学校校長
佐藤 俊隆 さとう としただ
「生徒が伸び伸び育つよう、先生方も伸び伸びと指導に当たれる学校環境をつくりたい」



名取市立増田中学校
2学年主任。体育科担当。「学年の先生方とは常に情報を共有することで共通理解を図るように心掛けている」



名取市立増田中学校
1学年担任。理科担当。「高い目標を持ち続けることで、生徒と共に、私自身も成長していきたい」

人生や生活に根差した 本質的なテーマを大切に

通常の授業にも出来る限り顔を出すようにします。先生方の授業を見るのはもちろんですが、出張や年休の先生の代わりに私自身が教壇に立つこともあります。本校ではそれほど多くはありませんが、過去に校長として赴任した中学校では、1年間で60時間ほど授業を行いました。ある時は、参加希望者50人を1つの教室に入れて、授業を行ったこともあります。授業におけるかわり合いを何よりも大切にしたいからです。

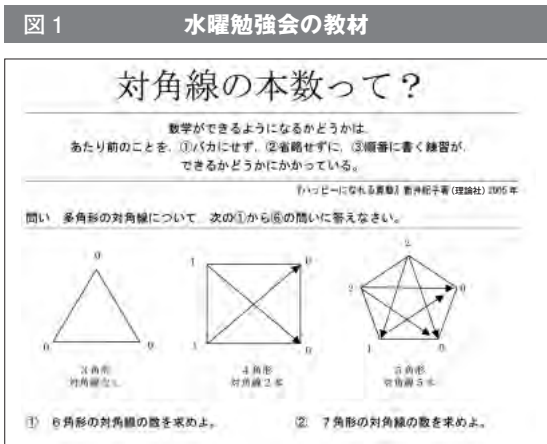
補欠授業では、課題プリントを基に、国語であろうと数学であろうと、私自身がその教科の授業にチャレンジするよう心掛けていま

学年集会などの場を生かし生徒に飛躍の機会を

2学年主任／体育科担当 川口哲央先生

す。その際、気を付けているのは、教科の課題に、生徒の日常生活や私の経験を重ね合わせて考えさせることです。例えば、英語では人権や自然環境など、いろいろなテーマと重ねることが出来ます。単なる知識や技能ではなく、人生や生活に根差した本質的なことを大切にし、知識を総動員すれば解けるような題材を提示しています(図1)。

新課程になり、授業時間が足りないといわれていますが、先生方には年間に行う授業の3分の1でもいいので、生徒の心に響く面白い授業をしてほしいと思います。中学校の教育のゴールは、その教科を好きにさせて高校に送り出すことだと、私は思っています。好きでさえあれば、後は自分で勉強するようになります。学力も付いてくるはずですよ。



佐藤校長が水曜勉強会で使用した数学教材。得意な生徒も苦手な生徒も一緒に考えられる教材とするのがモットーだという
*同校の資料をそのまま掲載

「デビュー」の機会を探る 教師同士の情報交換を基に

生徒の意欲を高めるために学年主任として気を付けているのは、出来るだけ生徒に活躍する機会や表現する場を与えることです。

例えば、担任と相談し、普段人前に立つ機会の少ない生徒に、中総体への意気込みを全校集会で発表させました。一言、二言でもか

まいません。みんなの前で自分で話すことが重要なのです。こうした機会を学年では「デビュー」と呼んでいます。教師が意図的にデビューの機会を与え、自信を付けさせることを大切にしていきます。「やりたい人」と聞いたら手を挙げる生徒は必ずいます。そうした

生徒だけではなく、力はあるけれども自分では手を挙げられない、少し背中を押したら次に進めるという生徒を出るだけデビューさせたいと考えています。一度発表して、もう嫌だと思いかも知れません。しかし、機会を与えられたことには自信を持ってほしい。そして、次に同じような場面があった時、自分から手を挙げてくれればいいと思うのです。

絶好のタイミングで生徒をデビューさせる

ためには、教師間での密な情報交換が重要です。学年集会などの改まった場に限らず、本校の職員室では、授業を終えて帰ってきた先生の間で「今日はこんなことがあった」「あの生徒がこういうことを言った」という会話が飛び交っています。そうした話の中から、もっと伸ばしたい、もう一段自信を付けてほしいという生徒を探り出し、担任と相談してデビューの機会をうかがいます。

担任の判断により「この子はまだ」となれば、デビューは見送ります。逆に先生から「この生徒の作文を学年便りに載せたい」という提案を受けることもあります。生徒が飛躍するチャンスを見逃さないためには、学年スタッフの風通しの良さが重要なのです。

生徒指導も「叱り方」次第でやる気高められるきっかけになる

生徒指導も、生徒のやる気高める機会と捉えています。私は長年、生徒指導を担当してきましたが、いつも心に留めているのは、「罪を憎んで人を憎まず」ということです。やってしまったことには罰を与えるけれど

も、その生徒の性格や人間性までは決して踏

生徒の心に火をつける

み込まないというのが生活指導の基本です。例えば、体育の授業中、ふざけた生徒がいたら、笛を吹いて全体を止め、その生徒を叱ります。その時、感情的に怒りをぶつけるのではなく、生徒の行為をきちんと「叱る」ことが大切です。感情的になつて気持ちを引きずつてしまうと、その後、その生徒が良い演技をしていても、冷静に見ることが出来なくなります。気持ちを切り替えて、次の場面で

私と生徒とのかかわり方

教師が高い目標を持つことが生徒の意欲に火をつける

1学年担任／理科担当 大森浩美先生

「本物」を見せることで
好奇心を刺激する

担当教科の理科の授業では、生徒に出来るだけ「本物」に触れさせることを意識しています。教科書を使って説明するだけでも、授業はある程度成り立ちます。しかし、生徒は一人ひとり生活体験が違うので、理科の事象を説明しても、生徒によって見たことがある、ないという個人差が生じます。そうした違いを埋めるためにも、できるだけ本物の素材を授業に持ち込むことが、生徒の意欲を高めるためには必要だと考えています。だからこそ毎回、素材選びにはこだわります。

良いところを褒めれば、生徒も「先生は自分の行為を叱つたのだ」という思いを持つてくれるでしょう。教師が指導にめりはりを付けることで、生徒もやっていいことと悪いことの区別を自ずと付けられるようになります。授業や行事、普段の生活などのあらゆる機会が、生徒にとって成長のチャンスという意識を持って、教師は生徒をしっかり見つけていくことが大切だと思うのです。

また、生徒は実際に手を動かしたり、いろいろなものを触ったりすることが好きなので、実験などの場面では、出来るだけ自由に活動させるようにしています。失敗も少なくありませんが、口頭で説明するだけでは理解できない生徒もいるので、あえて失敗から学ばせることも大切だと思っています。

今年度は1年生の担任をしています。入学当初はルールを教え込むことを徹底し、生活が軌道に乗ってきたところで、時間を守ろう、課題をしっかりと提出しようというような目標を与えるようにしています。その際、学年内で連絡を取り合いながら生徒に伝えていくことで、生徒は学校ではいろいろな先生が見て

図2 学年便り



週1回発行する学年便りは生徒をデビューさせるために欠かせないツール。いろいろな生徒を登場させ、その努力を認めて自信を付けさせる

くれているという意識を持ち、緊張感を持つて学校生活を送ってくれるようになります。生徒が悩みを抱えて元気がない時は、他教科の先生や部活顧問の先生とも連携を取り、今の状況にふさわしい先生に話を聞いてもらっています。生徒の悩みを全て担任が解決できるわけではありません。担任としては、まず生徒自身の様子や生徒同士の会話などから変化をキャッチすることが、意欲を継続させる上でも大切だと考えます。

もう一つ重要なのは、教師自身が常に高い目標を掲げておくことです。教師側が簡単に現状に満足してしまうと、生徒もそれとよく考えて努力をやめてしまいます。自分の基準が生徒の基準になってしまわないように、今よりもっと良くなれるという気持ちを常に生徒に見せていくことで、私自身はもちろん、生徒も成長していくのではないのでしょうか。

学校全体の取り組み

地域で認められる経験が生徒の自己肯定感を育む

毎日の学習記録で 生徒の変化を逃さずつかむ

自ら学習に取り組む姿勢を身に付けるために、同校では学習記録「チャレンジ増田」を活用している。毎日、前日の学習時間を記録して担任に提出するもので、全学年で年間を通して実施する。学習記録は、担任がチェックしてコメントを書いて返却する。13年度の1年生では、毎月、各クラスの生徒の担当者がクラスの学習時間を集計し、学習時間の多い生徒の名前を掲示して、頑張っている生徒が一目で分かるようにした。

生徒に学習時間を意識させるのがねらいだが、担任にとっては、生徒の変化をつかむためのツールでもある。普段は学習している生徒の学習時間が減れば、担任は生徒の周辺に変化を読み取り、生徒に声を掛けることが出来る。

また、生徒の主體的な学習を促すために、同校では全学年とも、定期考査の3日前は部活動を休みとし、毎日1時間ほどを生徒の質問時間に充てる。5教科の教科担当が教室にいて、生徒は自由に質問が出来る。実際に教師に質問する生徒は各教科10人程度だが、普

段、人前では質問できない生徒も、静かな教室で落ち着いて指導を受けることが出来る。「クラスの枠を取り払っているため、普段は見えない人間関係が分かります。生徒指導面でも意義があります」と大森先生は語る。

地域からの信頼が厚い 「増中マナツプ隊」

社会貢献を通して生徒の自己肯定感を高めることも重視している。

「増中マナツプ隊（マナーアップ隊）」は、有志の生徒で組織するボランティア団体だ。月1回のペースで、あいさつ運動、ゴミ拾い、駐輪場の点検整備などを行っている。学期に1回は、校区にある増田小学校の通学路に立ち、朝のあいさつ運動を実施したり、地元の警察署や防犯協会と共に、近くのショッピングモールでチラシを配ったりする。冬には学校周辺の除雪作業も行い、地域の運動会ではマナツプ隊の3年生が審判を務める（写真）。

マナツプ隊はあくまでも自由参加だが、12年度は3学年合わせて80人もの生徒が参加した。「地域の人たちからも良い評価をいただき、警察署からは今後もぜひ続けてほしいというお話をいただきました。生徒の自己肯定

感も高まると共に、活動を通して自分たち自身で身を律するところもあると期待しています」と川口先生は語る。

生徒や保護者のアンケート評価も高い。「秩序が保たれ安全で安心できる学校に近づいている」（3.5点）、「学校は交通マナーの徹底を図る努力をしている」（2.3点）、「学校はボランティア活動の推進を図っている」（1.7点）（いずれも回答は4段階評価で最高は10点、最低はマイナス10点、平均値は0点）などの項目で、いずれも平均値を上回っており、生徒や保護者からも一定の評価を得ていることが分かる。



写真 生徒同士が主體的に活動を行うのが「増中マナツプ隊」の特徴。隊長の号令の下、生徒同士で打ち合わせを行い、それぞれの役割をこなしていく中で主体性が培われていく